

お茶の水女子大学・新フンボルト入試が目指すもの —制度概要、実施状況、そして課題と展望—

お茶の水女子大学

安成英樹

お茶の水女子大学は、H26年度AP事業（テーマⅢ入試改革）に採択され、新たなAO入試＝新フンボルト入試の制度設計に着手した。従来の入試形態とは一線を画す、知識の量を問うのではなく、その知識をいかに活かすことが出来るか、を問う入試である。本報告では、その仕組みや制度設計上の理念、実施状況（成果）、そして今後の課題と展望について報告する。

1 理念と制度設計

大学にとっての最大の財産は学生である。より優秀で潜在能力のある学生を選抜できるかどうかは、大学の将来を大きく左右する。とくに新たな「学力の三要素」を踏まえて、思考力・判断力・表現力や主体性に力点をおいて評価するのであれば、実施側の負担を度外視してじっくりと手間暇をかけて受験生の資質を測る入試を構築するしかないという判断から制度設計を行った。その結果、一次選考としての、大学での学びを体感することに主眼をおき、高校2年生でも参加できる「プレゼミナール」と、二次選考としての時間をかけて受験生の資質を丁寧に見る「図書館入試」（文系）と「実験室入試」（理系）という、二段構えの仕組みを構築した。また合格者対象の研修会や入念な入学前教育体制も整えた。こうした本入試改革の制度概要や理念について説明する。

2 実施状況と成果

H26年度夏にAP事業に採択されてより制度設計を進め、H27年度にプレゼミナールのみ先行実施し、H28年度から新型AO入試として新フンボルト入試は実働した。AO入試定員を従来の10名から20名へと倍増させ、図書館入試のシミュレーション等入念な準備を整えた上での導入であったが、果たして高校生がこのたいへんな入試を受験してくれるか、不安も大きかった。だが実際には、導入初年度定員20名に対して出願者数は198名、約10倍の受験生が挑んでくれた。今年度までの過去4年間多少の増減がありながらも高倍率は維持されている。また出願者数とほぼ同人数の高校生（非AO受験者）がプレゼミナールに参加している。また、新フンボルト入試で涙を飲んだにもかかわらず、そのあとの推薦入試や一般入試に出願して合格する受験生が多数にのぼり、結果として本学入学者の約10%以上が、プレゼミナール経験者となっている。こうした実施状況や明らかになった効果について紹介する。

3 課題と展望

手間暇を惜しまず受験生の持つポテンシャルを丁寧に見極める、という新フンボルト入試は、受験生の負担もさることながら、実施運営側にも過酷な負担を強いている。また、合格者に対する追跡調査やその評価方法、さらにはどのような学生が選抜されているのかという最も重要な点については、未だ分析の端緒についたばかりといわざるをえない。とはいえ、プレゼミ受講者・出願者の多さ、本学他入試への再挑戦率の高さなどから、AP事業経費終了後も持続的安定的に継続していく義務があるのは自明のことであり、そのための実施体制の再検討、ブラッシュアップもすでに終えている。本報告の最後では、人的、物的、そして組織的な問題、未だに解決のできていない多種多様な課題についても率直に開陳し、大学入試改革のひとつの参考事例を提供したいと考えている。